

アイヌ語の文法書を作る

2008年7月18日

北海道大学アイヌ・先住民研究センター講演会
於 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟 W309 室
北海道大学大学院文学研究科・准教授
佐藤知己

tomomi@lit.let.hokudai.ac.jp

1. はじめに

本日は私のためにお集まりいただき、大変ありがとうございます。また、北海道大学アイヌ・先住民研究センターには、こちらからお願いして無理を聞いていただきました。常本センター長、山崎先生をはじめ、スタッフの皆様、ならびに関係の皆様方に厚く感謝申し上げます。せっかく文法書を作ったのですから著者としては、もちろんできるだけ多くの方に読んでいただきたいと思うのですが、特殊な内容であるために、一般の書店に並ぶということがほとんどないので、広くいろいろな方に存在を知ってもらうことが非常に難しい、という事情があります。このまま何もせずにいると出版そうそう絶版になりかねませんので、誠にずうずうしい限りですが、広報活動の一環として、このような場を設けさせていただきました。アイヌ語の普及という点から言えば、全く私的なものとは言えないとはいえ、ご理解をいただいた関係各位にあらためてお礼を申し上げます。

まずはじめに、タイトルについて一言申し上げる必要があります。今日は、主として拙著の『アイヌ語文法の基礎』を主眼としてお話申し上げることになりますが、書名からもおわかりのように、この本は厳密には「教科書」の一種であって、完備した文法書というものではありません。従って、厳密な意味では誇大広告ということになるかもしれません。にもかかわらず、あえて「文法書を作る」としたのは、教科書を作るためには何を教えるべきかが事前にわかっているはず、そのためにはアイヌ語を構成している諸規則、すなわち、広い意味での「文法」がわかっているはず、という信念によります。つまり、英語のようなよく研究されている言語の場合は、初歩の教科書で教えるべき文法規則は既に決まっているのであって、あとはそれをいかに効率よく学習者を引っ張って習得させるかが執筆者の腕の見せ所、という面がありますが、アイヌ語の場合はそもそも教えるべき文法規則そのものがまだよくわかっていない点がありますので、教科書を作るといっても、まず、基礎となる文法事項そのものを研究する必要があります。従って、アイヌ語の「教科書を作る」ということは、現時点では同時に「文法書を作る」という側面を持たざるを得ない、ということをご理解いただいて、お許しいただきたいと思うのです。

こういう機会はなかなかありませんので、私の拙い経験でも、若い人達の参考にあるいはなることもあるかもしれない、ということをお義名分に、露出趣味で恐縮ですが、本題に入るまで、多少私的なことに触れさせていただきたいと思います。

私がアイヌ語を対象を定めて研究を開始してから早いもので四半世紀が過ぎました。始めたころは、アイヌ語の研究がまだまだ一般に認知されていなくて、いろいろなことを言われたものです。代表的な意見で、今でも覚えているのは、次のようなものです。「お前は偉そうにアイヌ語を研究していると言うけれど、英語のような、世の中の役に立ち、人からも高く評価されるよう

なものを研究するだけの能力がないから、マイナーなことをやって現実から逃避しているだけだろう。英語をマスターして、その上、医学とか工学のような実学をやって、たとえば、無医村に赴くとかして、発展途上国の人々のために役立とうと考えるのがまともな人間の考えることじゃないのか（俺はお前みたいな人生の落伍者とは違うのだからね。」と。

これも一つの価値観で、私も一概に否定するつもりはありませんが、個人的には必ずしも全面的には賛同できない考えだと思っています。何よりも疑問なのは、こういう価値観のみが正しいということ全体誰が決めたのか、という点です。文部（科学）省でしょうか、親でしょうか、教師でしょうか。それはともかくとして、昔のアイヌ語研究に対する周囲の眼というものは、だいたい、こんなものでした。

また、こういうこともありました。これは大分後のことですが、「アイヌ語の研究を続けます」と言ったら、ある先生（誤解があるといけないので言っておきますが、今はもう故人の方です）から、「アイヌ語の研究をやって、マチのアイヌ語研究家にもなるのか（やめたほうがいいのでは・・・）」と言われました。こういう表現は、どう考えてもアイヌ語の研究を尊重したものとは言えないでしょう（念のために言うと私は大学教師がいわゆる「マチのアイヌ語研究家」より常に勝っているとは必ずしも思いませんが）。この件については後でまた触れると思いますが、ともあれ、私がアイヌ語をはじめた前後の時代の感覚というのは、だいたい、こんなものであったと思います（今はどうでしょうか）。

2. 私とアイヌ語

話が前後しますが、簡単に、私とアイヌ語との関わりを述べておきたいとおもいます。

2. 1. アイヌ語との出会い

私は1961年、札幌で生まれました。未熟児で、ガラスの保育器に入りました。子供の頃は、ひ弱で、病気がちでした。その上、人見知りが激しくて、ちょっとした刺激にも耐えられない、日常生活がある意味困難な子供でした。他の子が喜んで見ている「サンダーバード」が気持ち悪くて見ていられない。「こねこのびょうき」（調べてみると1963年にNHKの「みんなの歌」で放送されたもの）という歌を聞くとしくしく泣き出す。母親や三つ年上の兄などは、私のこういった弱点をおもしろがって、わざと私が嫌がるこの歌を歌って私を泣かせては大喜びしたものです（こういう人って、よくいるんですよね。でも、皆さんはどうか歌わないで下さいね。今でも泣いてしまうかもしれません）。こういう動揺しやすい性格のため、後年の私は自分の感情を表面に出さないよう、そのような状況に陥らないよう、過剰に用心するようになったと思います。それはともかく、私は北海道の生まれですが、身近にアイヌ語やアイヌ文化にふれるような機会はずっとありませんでした。私のもっとも古い記憶の一つは、二歳か三歳頃、北大植物園の池で大きなヤンマを見てものすごく興奮し、なんとかして取りたいと思ったことなのですが（実は、私は昆虫がもの凄く好きなのです）、植物園にはバチェラー博士旧宅などもあり、アイヌ文化の展示物などもあったはずですが、そういうものについての印象は残念ながら全然ありません。不可能なのはわかり切った話ですが、この時代にアイヌ語の調査ができていればよかったのに、と思ってしまう（職業病ですね）。バチェラー博士の名前を知るのは高校生以後、ということになります。

私が四歳の時、私の一生にとっての大事件が起きました。小学校教師の父親が病死したので

す。その時のショックは相当大きなもので、修復不能な大きなトラウマとなって残りました。ほんの一例ですが、四十年以上経った今でも、私は生花や花屋が嫌いです。花屋の前を通るのも避けるくらいです。生花の匂いが葬式→父親の死、を連想させるからです。

なぜこんな無関係な話を長々とするのか、いぶかしく思われるでしょうが、こういった私の生育史、嗜好、性格全体が、私をアイヌ語に向かわせる一つの大きな要因となったのだ、と思うのです。

父親の死後、新しい父親が来ました。義理の父は今も健在で、比較的良好な関係を保っていると思います。新しい父親は、遠慮してか、私には、一切、勉強せよとも働けよとも何も言いませんでした（これは、兄がずば抜けて学業優秀であったため、私に注意が向きにくかったことも幸いしたかもしれません）。あまり豊かとは言えない家計の中で、大学に行くこと、それも文学部に行ってアイヌ語を研究して就職もしないで何年もぶらぶらしていることを黙認してくれたのです。あくまでも仮定の話ですから、実際にはどうだったかわかりませんが、教師だった父親が健在だったら、絶対に許さなかったでしょう。おそらく、社会の常識というものを説いて、うるさく干渉し、深刻な衝突が引き起こされたことでしょう。父親の夢は、子供を東大に入れて役人にして出世させる、というものだったらしいので、こういう父親が健在だったら、おそらく、息子がアイヌ語を研究することなど決して許さなかったのではないのでしょうか。父親の死は私にとっては不幸そのものでしたが、私のアイヌ語研究にとっては、そのほうがよかったのかもしれない。

父親の話をしたついでに、母親の話もしてしましましょう。母親の方も今も健在ですが、息子の私が言うのもなんですが、ちょっと変わった人です。文学好きで、その他のことはあまり深く気にとめない、浮き世離れしたところのある人です。たとえば、料理なんかには全く興味が無い。家計が豊かでなかったせいもあるのでしょうか、私が子供の頃に記憶に残っているおかずと言えば、キャベツを刻んで油でいためて醤油で味付けをした「キャベツの油いため」か、ナスビを刻んでやはり油でいためて、味噌で味付けをした「ナスビの油いため」の二種類だけ。そのくせ、文学全集だけは何種類も持っている。百科事典や子供用の世界文学全集なんかも毎月取っている。おかげで、小学生のくせに、上林暁なんて作家の名前も知っているし、志賀直哉の「暗夜行路」は「小僧の神様」なんかに比べればまだましだな、なんて考える、ひねこびた子供になっていました。子供の頃はこれが当たり前だと思っていたのですが、今考えると、ちょっと変な家だったと思います。しかし、母親自身が本好きのせいか、本だけはどんなに高いものでも買ってくれました。このことも私のアイヌ語指向に間接的に影響があったと思います（後述）。

アイヌ語と直接関係のない話題が続いて恐縮ですが、もう少しご辛抱下さい。子供の頃の私が昆虫を異常に好んだことは既に述べましたが、私が住んでいた場所は国道近くの町中で、昭和30年代後半、40年代といえども、家が密集していて、森や川などはなく、本格的な自然に触れるような環境は皆無でした。しかし、印象深いのは、1 kmほど離れたところにごく小さな牧場があり、その牧場のはずれが崖になっていて木がうっそうと茂っている場所があったことです。まわりがほとんどすべて住宅地になっているなかで、このあたり一角だけが、崖地のため、全く手つかずのまま残っていたのでしょう。樹種はわかりませんが、おそらくニレ類のような見事な太い広葉樹が急な崖に密生していて、昼でも中は薄暗く、ちょっと怖いような場所でした（ああいう迫力のある木は、その後、絵や写真で見ただけで、出会うことがなかったように思います）。特筆すべきは、火山灰質のこの崖の麓に洞窟があって、そこから水が湧き出していたことです。こ

の湧水は、小さな流れとなって、200mほど離れたところにある大きなため池に流れこんでいました。私はこの場所に、なぜか非常に引きつけられ、さすがに雪が積もる冬は除きますが、春、夏、秋と、小学校時代は、数年間、ほとんど毎朝、来る日も来る日もこの場所へ通いました。洞窟は10mほどで、中に入ると子供でも立ってられないくらい狭いので、奥まで入ったことはありませんでしたが、子供心に、この場所が特別な場所であるように感じていました（今にして思えば、このような場所は、アイヌ語で mem「泉地」（ちなみに、私の千歳方言の資料中では、ukurmem という地名の一部としてしか例がない）と呼ばれるような場所だったのでしょう。あるいは洞窟はいわゆる「あの世の入り口」（千歳方言では ahunporu）と呼ばれるようなものだったかもしれません）。今でも、できるものならこの場所をもう一度見たい、と思っています。しかし、残念ながらもう二度と見ることはできません。私が中学生になるとほぼ同時に、樹木が伐採され、埋め立てられ、住宅地になってしまいましたから。そのときの無念さは、今でも忘れることができません。樹木を伐採して湧水を埋め立て、住宅地を造成することは合法的な経済行為であって、法律上、社会通念上、何ら非難すべきことではないかもしれません。かえって、土地の有効利用ができて「世の中に役立つ」、賞賛すべき行為かもしれません。それに怒りを感じるのは、遊び場を奪われた子供の心性であって、いい年をした大人が考えることではない、と言われるでしょう。しかし、私は、この体験がきっかけで、いわゆる「大人」の論理、「世間」の常識、というものに強い疑問を抱くようになったと思います。世間の「常識」は、私が大切だと思っていることを、子供っぽい、非現実的な馬鹿者の考えることだ、としか思ってくれない、という強い孤独感を感じました。この体験は、大学の先生から、「アイヌ語なんて大学での研究に値しない」という趣旨のことを言われた時に、反発を覚え、逆にアイヌ語の研究にのめりこむ一因となったと思います。「大学の先生ともあろう者が、こんな世間的な価値観で物をお考えになっているのですが。マチのアイヌ語研究者、大いに結構ではありませんか。」と不遜なことを考えたわけです（もっとも、「世俗」や「現実」に違和感を持つ私が期待をもって飛び込んだ大学や学界という世界が、私の期待通りだったかどうかは別問題ですが）。しかし、逆に、こういう経験も、私をいわゆる「通常の」道から引き離して、アイヌ語研究へと向かわせる力の一つになったとも言えるので、結果的にみれば、かえってよかったのかもしれません。

アイヌ語に話を戻すと、小学二年生の時、大きな紙に百科事典（小学館）の「アイヌ語」の項目を抜き書きしたことを覚えています。なぜそんなことをしたのか、今では直接の動機は思い出せませんが、興味があったことは確かです。この頃、この百科事典は出たばかりで、最初に届いた第一巻にたまたま「アイヌ」という項目が含まれていたことも大きかったと思います。母親が食う物も食わずにこの高価な百科事典を毎月とり続けた効用？です。その中で、四十年経った今でも覚えているのは、鮭はアイヌ語の「サキペ」に由来する、という記述です（「サキペ」は私が意識的に覚えた最初のアイヌ語の単語、ということになります）。ちなみに、方言差や話者の減少がおそらく原因だと思いますが、その後、アイヌ語を研究するようになってからこの単語を話者から直接聞いてみたい、と思いつけていますが、いまだに果たせていません。この百科事典の「アイヌ語」の項目を書いた人の名前もその時に覚えました。「田村すゞ子」と書かれていました。だから、田村先生のお名前は、私は小学生の頃から知っていました（ご本人にお会いするのはその約20年後。もちろん、田村先生は私の深い感慨などは全く関知されるところではありませんでしたが）。もっとも、子供には「すゞ子」の踊り字がすぐには読めず、はじめは「すべ子」先生の間違いであろうか、なんて思っていました（田村先生ごめんなさい）。このように、

アイヌ語に対する興味は早くから芽生えていたと思いますが、これ以上に知識を深めるには至りませんでした。

言語学に対する興味は高校生の時に芽生えました。きっかけは英文法に対する興味です。英語のテキストを読む、ということから、文法的におもしろい用例をカードに取ったりすることに興味を覚えるようになりました。学校帰り、すすきので地下鉄を降りて、旭屋書店の英語や言語学の棚をよく見ました。また、4丁目にあった丸善へも寄るようになります。英語もろくに読めないのに、ラテン語やギリシャ語の勉強をしたりもしました。また、風間喜代三先生の『言語学の誕生』という岩波新書が出たところで、言語学史や歴史言語学というものに触れて、大学に入ったら言語学というものを勉強してみたい、と漠然と思うようになりました。服部四郎の「音声学」、ソシュール『一般言語学講義』などもこの頃、すでに買って持っていました（もっとも、当時は全く歯が立たず、それらの本の優れた中身を理解するまでにはその後、何年もかかりましたが）。

外国語に対する興味があったので、その種のものには敏感に反応するようになっていましたが、高校の図書館にはラテン語、ギリシャ語に関するものが少しと、独仏語に関するものが少しあるだけでした。が、「その他の外国語」のところに、古ぼけた、ものすごく汚い、小さな本がひっそりと置かれていました。カタカナと平仮名が入り交じったヘンテコな本で、あまり権威がありそうな本とも思えない。実は、これこそが知里真志保著『アイヌ語入門』だったのです。しかし、この時点では、若い私にはこの本の持つ価値を正しく評価する力などありません。「変な本」というだけで、ぱらぱらとめくっただけで、そばを通り過ぎてしまいます(この本については後述)。また、同じ頃、岩波文庫から知里幸恵『アイヌ神謡集』が出版されます。私も早速買って、学校の行き帰りに地下鉄の中で読んだものです。しかし、辞書も文法書もないので、アイヌ語に親しむ、というわけには行かず、こういう言語もあるのか、と思っただけでした。また、知里幸恵の序文の深い意味に思いが至るには何分、若すぎました。また、この頃、丸善へ行くと、バチラー『アイヌ語辞典』、服部四郎『アイヌ語方言辞典』が再刊される、というポスターが張られていましたが、値段が高くて高校生が気軽に買えるものではないので、実際に手に取って見るには至りませんでした。しかし、重要なのは、たまたまですが、ちょうど、私が大学に入る前後に、アイヌ語の様々な本が再刊されて、それまでは古書店で法外な値段を付けられていた基本資料が、いくらかでも入手しやすい状況になったということで、これは運命だったと思います。また、これらの動きによって、「アイヌ語」という言語が一般の耳目に入りやすい状況であったことも大きかったと思います。

ろくすっぽ受験勉強もせず、言語学の本などをめくっていたため、高校時代の成績は惨憺たるものでしたが、なんとか北大にもぐりこみました。灰色の高校生活から脱出できて、ほっとしましたが、高校時代の鬱々とした気分、というものはずっと残っていて、その後は母校の側を通るのも嫌で、30年が過ぎました。

ある時、高校の同期会の女性から「同窓会の企画で、先輩が後輩に話をするという企画があるんだけど、やってくれないか。」と依頼を受けました。複雑な心境ながら、依頼者が良かったのと、「故郷に錦(?)を飾る」ような色気も若干出て、行ってみました。行ってみると、高校時代の担任が来ています。白髪にはなっていますが、わかります。前へ行って「ご無沙汰していました」と挨拶すると、「いやー、お久しぶりですなあ。先生は退職されてから、どれくらいになられましたかあ。」と聞かれてしまいました。私のことを退職した同僚の誰かだ、と思っているのです。いくらハゲたとはいえ、これにまずめげました。後輩諸氏を前に自分の研究について話

しましたが、まあ、ご想像の通り、寝ている子もいます。「俺のハナシをマジメに聞いているようでは、志望校合格はおぼつかないわなあ。まあ、こんなもんだらう。」と思って帰りかけると、一人のまじめそうな男子生徒がそばに寄ってきました。何事か、と身構えましたが、「先生、僕と握手して下さい。」というのです。要領を得ないまま握手をして、「話を聞いてくれてどうもありがとうございます。」と挨拶をしましたが、後で、いったいあれはどういうことだったのだろうか、と考えてみました。おそらく、彼は「佐藤さんは高校時代もぱっとしない人だったらしい。みたところ、特に優れた人物とも思えない。今も重んじられてはいないようだ。やっていることもなんだかわけがわからないが、少なくとも世の中からもはやされるようなことではないのは確かだ。しかし、こんな役にたたなそうな人でも、好きなことをやって飯が食えているのだから、自分などはますます前途有望であろう。よかったー。」と思ったのではないのでしょうか。ともかく、悩める青少年を大いに力づけることができ、よかったわけですが。それから、印象的だったのは、もう一人、どこか気品のある女子生徒が近づいてきて、「先生のお話を聞いて、小さいころを思い出して、とてもなつかしい感じがしました。ありがとうございました。」と言ったことでした。「なんで？」と聞くと、「自分の父は教師で、子供のころ、父の転任に伴って日高地方を転々としてきました。アイヌ文化に触れる機会もありました。だからアイヌ語の話を聞いて子供時代を思い出したのです。」というのです。私も、柄ではありませんが、思わずこんなことを彼女に言って別れました。「今はね、その価値がわからないかもしれない。親のせいで地方を回って、損をした、と思うようなことがあるかもしれない。しかしね、将来ね、お父さんのおかげで、かけがえのないすばらしい経験をした、と思う時が、いつか、きっと来ると思いますよ。よかったですね。」と。彼女はにっこり一礼して去って行きましたが、この彼女の一言は、私に多くのことを考えさせてくれました。いくら利益一点張りの土地開発業者といえども、私と同じように、子供の頃からその場所が好きで、何年何年もその場所に親しんでいたとしたら、いくら金のためとはいえ、何の躊躇もなくその場所を埋め立てたりできるだろうか。多くの日本人にとって、アイヌ語やアイヌ文化は、何の実益ももたらさない崖地のようなものではないだろうか。なくなろうが、廃れようが、一向構わない、自分たちとは無縁のものだ、という位置付けでしょう。しかし、幼い頃からアイヌ文化が身近にあって、この女子生徒のように親しんでいたとしたら、たとえ日本の文化とは違うものであっても、共感や愛着を持ち、大切に思うのではないだろうか。難しい面があることは確かですが、子供の頃から、機会あるごとに本物のアイヌ文化に親しむ経験を持つ、ということは、今後のアイヌ文化行政や教育が常に念頭に置かなければならない点だと思います。ちなみに、母校で昔の話をした後は、不思議なことに、母校の前を通っても、以前のように動悸や息苦しさを感じるものがなくなり、存在そのものを意識しなくなっていました。この境地に至るまでに三十年かかったことになります。我ながらやっかいな性格だと思いますが、反面、言語の研究のように、一つの問題を解くのに恐ろしく長い年月がかかり、その間、ひたすらしつこくそのことばかり考え続けていなければならない、というような分野に向いていたとも言えるので、人間、何が幸いするかわからないものです。

2. 2. アイヌ語を専攻する

さて、言語学科に入り、アイヌ語にも興味は持っていたものの、アイヌ語を専攻する、ということを決めていたわけではありませんでした。それに、北大にはアイヌ語の専門家がいませんでした。このことで大いに力があつたのは、「サッポロ堂書店」という古書店を経営され

ている、石原誠さん、という方でした。アイヌ語関係の本などをちょくちょく見に行っている間に親しくなり、「アイヌ語に興味があるんだったら、開拓記念館に藤村先生というすごい人がいるから、藤村先生のアイヌ語勉強会に行ってみたら。」とすすめてくれました。藤村先生の勉強会では、当時、四宅ヤエさん、という、白糠方言の話者のオイナ（神謡）の講読をしていました（後には B. Pilsudski の *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore* を使ったサハリン方言テキストの講読になりました）。この勉強会で藤村先生が聞かせてくれたテープによって、アイヌ語の発音を初めて耳にすることができました。第一印象は、「日本語の方言を聞いているようだ。」というものでした。この印象が何に由来するものなのか、その後、確かめる機会がありませんが、今でも問題として心に残っています。藤村先生の勉強会に参加していた人達のほとんどすべてが、その後、アイヌ語、アイヌ文化研究で大活躍されるようになりました。そういう点で、藤村先生という人は、やはりすごい人だったと思います。藤村先生が、その後まもなく、北海学園大学の教授になられ、いままアイヌ文化研究の権威としてご活躍されているのは周知の通りです。ただ、藤村先生は、アイヌ語の実力は勿論すごい方ですが、言語学の専門家ではないので、私がめざしているようなアイヌ語の言語学的分析の点で指導を仰ぐことはできませんでした。その後、私の研究の方向性が次第に固まるにつれて、疎遠になっていったのは残念ですが仕方のない面もあったと思います。しかし、石原さんと藤村先生には、お世話になったと思っています。

藤村先生のもとで、アイヌ語の勉強を始めたものの、直接、アイヌ語の話者に会う機会はなかなかめぐって来ませんでした。私は人付き合いが得意な方ではなく、積極性もあまりありませんでしたので、もっぱら本でアイヌ語を勉強していました。知里真志保『アイヌ語入門』、『アイヌ語法概説』、『アイヌ語法研究』、村崎恭子先生の『カラフトアイヌ語文法篇』、それから、服部四郎や田村すず子先生の論文を図書館で探して、コピーしては少しづつ読んでいました。それらのコピーは今でも使用していますが、藤村先生の勉強会で習った製本方法で閉じられているので、懐かしい気持ちになります。

言語学の主任教授の池上二良先生（北海道大学名誉教授、今もご健在）は、学者としてはこれ以上ないくらい立派な方でしたが、アイヌ語研究についてはどちらかといえば慎重な態度を取っておられたように思います。アイヌ語の研究を止めはしないが、強いて勧めもしない、という感じでした。ずっと文献だけでアイヌ語を勉強していたのですが、ある時、大学のレポートに、たまたま手に入れた有珠善光寺の「念仏上人子引歌」というカナ書きのアイヌ語資料に現れる不可解な表記（he を「セ」と表記する）について報告したところ、先生に呼ばれました。私はこの表記が現在とは違う音価を反映したものではないか、という趣旨のことを書いたのですが、提出してしまってから、それが早計であることに偶然気づきました。加藤正信という有名な方言研究者の論文をたまたま読んで、この表記が日本語東北方言話者のバイアスによるものではないか、という疑いを持っていました。しかし、池上先生は、私が言う前に、ちゃんとその可能性を指摘されたので、その鋭さに驚かされました。池上先生は、昔風のドイツの大学教授のような謹厳な雰囲気のある怖い先生でしたが、アイヌ語の古い文献の研究を絶えず色々と助力して下さいました。池上先生が私のことを評価して下さったことはこれまでのところ全くありませんが、一度だけ、ご自分の論文の中で私の論文に言及して下さいました。それはアイヌ語最古の文献である「松前ノ言」にあらわれる「ちやうき」は「定器」という日本語に当たるのであろう、という指摘です。私は日葡辞書などを引いてもものものしく論証しましたが、池上先生は「広辞苑」を

用いてあっさりそのことを指摘されました。広辞苑を引いてみもしないで、一体何をやっているのかね、とたしなめられたような気がしました。

このように、学部生時代はもっぱら古文書のアイヌ語の研究ばかりやっていたのですが、話者に直接話を聞くことができないので、フラストレーションはたまる一方でした。しかし、ちょうどその頃、私よりずっと上の先輩で、アイヌ語を研究していた切替英雄さんが大学院に復学して来て、おつき合いしていただくことができるようになりました。切替さんは若くして「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」という、アイヌ語学史上の超重要論文を書いた天才です。また『アイヌ神謡集辞典』の著者としても有名な方です。切替さんのことは、既にいろいろなところで耳にしていますが、「すごく厳しい怖い人だから近づくな。」というのが共通する意見でした。しかし、実際にお会いしてみると、確かに口は悪いがものすごく良い人で、奥様ともども、大変お世話になりました。千葉のご実家に連れて行っていただいたこともあります。お父様はお医者さんをされていましたが、北大のご出身で、そのためか私にも気さくに接して下さいました。今でも忘れられないのは、会話が一段落付いた後、奥から恥ずかしそうに薄い一冊の雑誌を持ってこられたことです。私も知っている、有名な短歌雑誌です。「私の作品が載っているんですが、佐藤さん、一つ見て批評してくれませんか。」とおっしゃるのです。作品そのものは今では忘れてしまいましたが、妻子を抱えながら学問研究に打ち込む貧乏大学院生（すなわち切替さんのこと）の苦悩の心境を詠んだ歌だったと思います。ところが、氏名欄が「切替英雄」となっています。なんと息子さんになりかわってご自分の作品を投稿されていたのです。これには私も驚いてしまいました。お名前が珍しいので、これを見た人は切替さんご自身の作だと思って疑わなかったのではないのでしょうか。切替さんご自身はお父様に強く抗議されていましたが、切替さんの慌てぶりや、お父様の、いたづらがばれた子供のような表情は今でも忘れられません。私にとっては大切な、懐かしい思い出です。閑話休題、切替さんは、親切にも、私を旭川方言話者である砂沢クラさんのところへ連れて行ってくれました。これが、私がアイヌ語の話者がアイヌ語を話すのを、直接耳にする、記念すべき最初の機会となりました。1983年4月29日のことです。初めて耳にする砂沢さんのアイヌ語は、本に書かれているアイヌ語とかなり違っているのでびっくりしました。その後、切替さんは、同じく言語学科の先輩である大島稔先生（小樽商科大学教授）に相談してくれたらしく、私を、当時、切替さんと大島さんが実働部隊で進めていた北海道教育委員会のアイヌ民俗文化財調査に入れてくれました。この調査はアイヌ文化の伝承者を実際に訪ねて聞き取り調査をするもので、私にはねがったりかなったりのものでした。この調査の中で、様似の岡本さん、静内の織田さん、という二人の話者の方と知り合いになることができ、かなりの経験を積むことができました。しかし、詳述は避けませんが、若い私の能力では、まだまだアイヌ語を調査して研究する、ということがどうということなのか、よくわかっておらず、貴重な機会を十分に生かし切ることができずに今日に至っているのは申し訳ないことだと思っています。この民俗調査は、東大教授、北大教授を歴任され、その後、早稲田大学教授に転じられた有名な渡辺仁先生が主幹となっていました。渡辺先生は、一言でいうと、「研究の鬼」のような方でした。晩年、肺の病気が重篤になられて、調査、研究など、到底できる状態ではないにもかかわらず、奥様に体をささえられて、文字通り亡くなる直前まで伝統文化を知るお年寄りを相手に実地調査をされていた姿は、鬼気迫るものでした。まさしく、学者の鑑のような方でした。しかし、その一方で、下司の勘ぐりですが、人の誤解を受けたり、人間関係の面で苦勞されることがあったのではないかと思います。あまりの学問一途な姿勢に、私達も、その学問的な情熱は理解しつつ

も、「とてもついていけない。」と思うことが正直ありました。渡辺先生は、そのひたむきな努力と、輝かしい学問的業績にみあう処遇を現実の世界で受けられたのでしょうか。世の中の難しさ、というものをつくづく感じます。

2. 3. 千歳方言話者白沢さんとの出会い

渡辺先生の民俗調査の中で、1989年に千歳地方の調査をすることになりました。この時、はじめて、今回の文法書の元となるアイヌ語を教えていただいた白沢なべさんと会うことになりました。白沢さんは、序文にも書いた通り、大変な能力の持ち主で、しかも辛抱強く、私の相手をしてくれました。こちらの疑問に対して丁寧に、しかもユーモアをもって応えて下さる態度に、私はすっかり魅了されてしまいました。今思えば、アイヌ語ができない、と見て、ずいぶん手加減をしてきていたのだと思いますが、私にとっては、それが結果的にはよかったのだと思います。服部四郎の『アイヌ語方言辞典』という、2千項目ほどの基礎単語を載せた辞書が既に出版されていましたが、勿論、千歳方言の資料は入っていないので、この本に出ている項目を、一つ一つ丁寧に教わることにしました。それまでの静内や様似の調査では、このような基礎的な調査をほとんどせず、口承文芸のテキストを主に採録していたので、全体像をうまくつかむことができなかった、という反省に立って、やり方を変え、一から地道に習うことにしたのです。このことは、他の面でも、良い方向に私の研究を向けるのに役立ったと思います。千歳方言は沙流方言と極めて近いのですが、沙流方言については田村先生のすばらしい記述がたくさんありましたから、それらを土台として、先に進んで行くことが可能でした。資料の少ない方言だったら、そう簡単には結果をまとめることができなかつたらうと思います。この点について、どうしても言及しておかなければならないのは、白沢さんを世に紹介したお二人の研究者のことです。千歳の郷土史家の林元一氏は古くから白沢さんをはじめ、伝承者の方々と親交が深く、白沢さんも常に感謝の言葉を口にされていました。地域に信頼の篤い林先生と、専門家である千葉大学の中川裕先生が協力して、はじめて白沢さんのすばらしい知識が広く知られることになりました。私は、いわばこのお二人が開拓したルートを、ただ利用させていただいただけです。後発の私を排除することもできたはずですが、私の調査を寛大に黙認してくれました。これは、自分に立場を変えて考えてみると、言うはやすく、行うは難しいことです。

白沢さんについてお話ししたいことはたくさんありますが、録音を聞いていただいたほうがよいと思います(英雄叙事詩の冒頭部分を語っておられるところです)。本当にすばらしい方でした。

3. アイヌ語の文法書を作る

いよいよ本題ですが、時間の関係で、ごく主要な点についてだけ述べさせていただきます。

3. 1. アイヌ語の文法書作成上の理論的問題点-木村彰一先生の言葉

アイヌ語の文法書を作るにあたって、非常に大きな影響というか、圧力を受けたのは、著名なスラブ語学者、言語学者の木村彰一先生のお言葉でした。木村先生のごく晩年、北大に集中講義に見えられた時、その授業に出席させていただいたことがありました。講義の後、ロシア文学の研究室に押しかけて、木村先生の警咳に少しでも接してみたい、と、勇気を振るってお話させていただきました。何しろ、木村先生は、多言語に通じた、大変な大学者で、伝説的な人物でした。なによりも、『アイヌ語方言辞典』の名寄方言の調査を担当されたので、アイヌ語のこともよく

ご存じの筈であったからです。木村先生のアイヌ語に関するお話を聞かせていただけたら、と思い、無理に自分を励まして、御前に罷り出たわけです。結果はどうであったかという、木村先生のお言葉は、その真意は別として、はなはだ私をがっかりさせるものでした。木村先生は、私が「アイヌ語の文法を研究している。」と自己紹介すると、「アイヌ語に文法なんてあるんですか。」とおっしゃったのです。私は耳を疑いましたが、確かにそうおっしゃったのです。ショックを受けて、その後の受け答えはしどろもどろでしたが、木村先生が名寄方言を調査された時のお話が聞きたいのですが、と言うと、「ただ、お酒ばかり、北風磯吉さんと飲んでいたような気がするね。」とはぐらかしたようなお答えがいただけたばかりでした。私のただならぬ顔色を見て、木村先生もさすがに気の毒になったのだと思いますが、「アイヌ語には標準語がないからね。文法書を書くのは難しいね。」と続けられました。もう亡くなられましたが、福岡星児先生という、人柄の練れた、ロシア文学の主任教授が話題を変えて、自分は子供の頃、美少年だったので、バチェラー先生にかわいい子だね、と頭をなでてもらった、という話をされたりして、その場を取りなすようなことを言って下さったので、幸い、何事もなくうち過ぎましたが、私は相当なショックを受けて早々にその場を辞去しました。木村先生は、それからまもなく、仕事先で倒れられて不帰の客とされましたが、もう一度、ご真意を直接うかがってみたいかと思います。

その後、ことあるごとに、木村先生のお言葉を私なりに考え続けて来ましたが、その表現はともかく、やはり、アイヌ語の文法書の根幹に関わる指摘ではないか、と思うようになりました。

日本語の文法も、実は学校で教えられる、標準語（主として書き言葉）があるために、標準語だけを対象とすることによって、一つの文法書をまとめることができるのであって、日本語の全方言をくまなく平等に扱って総合的な文法書を書こうと思ったら、それこそ、命がいくつあっても足りないでしょう。アイヌ語は日本語に比べ、方言の分化程度がおそらくは低いとは言っても、資料的な問題もあって、その困難は大変なものでしょう。それから、これは木村先生は特におっしゃいませんでしたが、アイヌ語の資料が、性質上、口頭言語に限られる、ということも、文法の研究には著しい困難をもたらすと思います。書き言葉であれば、書き手は、何度も見直して、間違いを訂正した上で発表するのが原則ですが、話し言葉は、一回限りの、偶然的な要素を多分に含むものです。日本語の文法も、話し言葉の生のテキストに現れる、あらゆる現象のすべてを、完全には解決していないと思います。それくらい、書き言葉に比して、話し言葉の資料は扱いにくいわけです。自然な発話は、文字で表現すると、多くの不規則を含んでおり、首尾が一貫しなかったり、言い間違いや、言い直し、あるいは明らかな文法的な誤りさえも含むものです。こういう資料を基礎として文法をまとめることができると思うのは、あまりにも楽観的すぎるわけです。木村先生のお言葉は、そういう点も含めた御発言だったのかな、と思っています。また、これも木村先生が直接指摘されたことではありませんが、話者の問題があります。アイヌ語のような話者が少ない言語では、その方言の話者が、事実上、その話者一人に限られるということも稀ではありません。そのような場合、その話者の言語を記述しても、その言語全体の体系を明らかにしたことには必ずしもならないのではないかと、という問題が生じてきます。その話者一人にしか当てはまらないような文法は、無意味なのではないか、という批判の余地が起こって来るわけです。

これらの問題を完全にクリアすることは不可能ですが、方言を限ることによって、まず、文法書を書ける可能性が出てきます。その場合、一つの方言だけわかっても仕方がないではないか、と言われるわけですが、それは、今後、他の異なる方言についても、できるだけ解明をすすめて

いくしかないのではないか、と思います。ロシア語と同じようなわけには行かないのです。また、口頭言語の不規則性、複雑さの問題は、全体からみて、例外的な構造かどうかを判断して、そのような例外的と思われる例を用いる場合は、その旨を注記する、という方法を用いるしかないのではないか、と思っています。今回の文法書でも、用例が少ないもの、あるいは体系的にみて例外的なものについては、なるべくその旨を注記するようにしてあるつもりです。例えば、命令文に eani や ecioka という二人称代名詞が用いられた例はほとんどありませんが、ごく稀に起こっている例があります。その場合については、極めて稀な現象であることを注記してあります。また、一人の話者の言語を代表として扱って良いのか、という問題は、無視できない大きな問題です。これは、観念的な説明で、あまり説得力はありませんが、古くソシュールが指摘している点が参考になると思います。ソシュールは、cooperatif「協働的」という表現を用いて言語のある一面を説明しているのですが、要するに、言語の機能から言って、話者は他者の理解を求めるわけですから、他の話者とあまりにも異なる話し方をするとこの機能が果たせなくなってしまうので、なるべく相手に理解されやすいように、相手の言葉に近い言葉を用いようとする力が常に働いている、という趣旨のことを述べています。要するに、原理的に、話者が一人しかいないからと言って、その言葉が同じ地域の他の話者と似ても似つかぬものである、という可能性は極めて低いと考えられます。もちろん、そのような例外的事情は常に想定しておく必要はありますが、確かめようがないのに、そのような理論的可能性をひたすらあげつらうのは、表現は悪いですが、ただ「小賢しい」だけ、と私には思えます。

このように、木村先生のお言葉は、私にとっては重い宿題として残されましたが、私なりにこれからも考え続けて行きたいものだと思っています。

3. 2. 先行文法書、教科書の問題点

自分で教科書を作る場合、まず、念頭に上ったのが、知里真志保先生の『アイヌ語入門』でした。この本は、大学に入ってから、ノートに筆写するくらい、熱心に勉強しました。その内容のすばらしさも熟知していると自分なりに自負していますが、その後、自分の研究を進めて行くにつれて、不満も多く感じるようになりました。ですから、当初、拙著の表題は、ずばり、『アイヌ語入門』とする予定でした。知里先生の名著に代わるものを作る、という意気込みを示したかったのですが、文法書の出版のお世話を下さったドイツ語学の清水誠先生が、『アイヌ語文法の基礎』と例えばしたらどうだろうか、とおすすめくださったので、いくらなんでも知里先生の名著と同名では、命がいくつあっても足りなからう、ということを感じて、最終的には今の書名に落ち着きました。

知里先生の執筆意図を超えた批判をすることは当を得ていないとは思いますが、私が感じていた不満は、概略的には以下のようなものでした。

- 1) アイヌ語入門なのに、文の基本構造に関する説明がない。
- 2) どの方言に基づいているのか、言及がない。
- 3) 地名資料に基づいて議論を展開しているが、そもそも、地名資料をアイヌ語の一次資料として扱って文法記述を行うことには問題がある。
- 4) 「音韻変化」のような、文法においてはそれほど本質的とは言えない現象に関する言及が多すぎるのではないか。しかも、その説明が必ずしも必要十分なものとは言えない。

5) 複合名詞の記述に多くの紙数が割かれているが、語形成の一般的制約を無視しているために、根本的な点で不適切な部分がある。

6) us「そこにいつもある」、ot「そこに群在する」のような動詞が他動詞であることを指摘したのは卓見だが、その機能の説明が十分、当を得たものとは言い難い。特に、これらの動詞が二種類の意味構造（場所が主語になる構造と対象が主語になる構造）を取れる動詞である、という点が見過ごされているのは問題である。

7) この本で文法を勉強しても、読本が付いていないので、アイヌ語の文が具体的にどのようなものなのかがわからない。

拙著は、不十分なものとはいえ、私が具体的に感じたこれらの不満に配慮したものとなっています。

次に、田村先生の「アイヌ語」（『言語学大辞典』1、三省堂）は、さすがに記述が正確で、余人の追従を許さない学問的厳しさを感じますが、やはり概説であり、一つの方言についての詳しい記述ではないので、その点で不満が残ります。拙著は、やはり不十分ながら、田村先生の記述が詳しい説明をしていない現象についても記述を加えています（「抱合」、「分離動詞」、「尊敬表現」、「再帰」、「複合名詞の構造」など）。

有名な中川裕先生の、「エクスプレスアイヌ語」（白水社）は、会話を基調とした現実的な内容かつ文法項目の種類や量も充分であり、初歩の教科書としては非常にすぐれたものだと思いますが、拙著と根本的に異なると思われるのは、「エクスプレス」は執筆者による作例と、話者からの用例の区別があまり明確ではない、という点です。作例は、短く、ポイントとなる現象も配慮されているので、学習者には理解しやすく、執筆者にとっても色々な意味で扱いやすく教科書執筆に有利、という利点がありますが、言語学的な記述としては、別の意味で問題があることは明らかです。話者の「お墨付き」があったにしても、やはり作例には作例の限界があると思います。また、千歳方言と沙流方言の両方の資料を用いていること自体は序文で断ってありますが、具体的にどこが千歳方言でどこが沙流方言なのかの言及がない、というのは、不安を感じます。初心者が基礎的な文法を容易に学ぶため、という目的を果たせばよいわけですから、あまりうるさいことを言う必要はないのかもしれませんが、やはり一長一短があると言えるでしょう。拙著は、序文で断ってあるように、作例というものは、原則全く使用せず、説明のために使用する場合はその旨を断ってあります。

もっとも、私のこのようなコメントについては、次のような反撃がなされる可能性も十分あります。「あんた（＝佐藤）は、作例でない、と自慢しているが、言語学者が質問して、無理に答えさせた人工的な例文ばかりじゃないか。どこが作例じゃないのか。けっ、へそが茶を沸かすぜ。」まあ、中川先生がこう言われるかどうかはわかりませんが、腹の中で思う可能性は大いにあります。この点は、非常に難しい問題で、正直、私も弱ってしまうわけですが、上で述べたように、なるべく複数の例があることを確認しつつ記述していくことによって、このような批判にある程度答えることができるのではないか、と思っています。また、捨て台詞気味ではあるのですが、こういう理論的な不都合ばかり言い立てるのは、「小賢しい」だけで、必ずしも生産的ではないと私は思います。とにかく、話者が実際に言ったことを土台にして、それでどこまでいけるのか、やってみることが重要だと思います。その上で、おかしいところがあれば、証拠をあげて議論し、その通りであれば直せばいいだけのことです。

3. 3. 私の『アイヌ語文法の基礎』の成り立ちと特色

以下、簡単に、実際の作業を振り返ってみることにします。私はこんなふうにやりました、という報告であって、これが正しいとか、唯一絶対の方法だ、というつもりは全くありません。

まず、文法項目の設定ですが、もっとも新しい、包括的な文法記述である、田村先生の記述を下敷きにして、加えるべき文法項目を設定しました。同時に、中川先生の『エクスプレス』も参考にしました。その結果、大小併せて75項目が残りました。そのとき、使用したカードはとつてありますが、「動詞」、「名詞構文」、「時間表現」のようなきわめて雑ばくなものです。

次に、既に文学部の「アイヌ語」で使用していた教材で、使えるものを項目に入れて行きました。その結果、最初のバージョンができあがりしましたが、非常に簡単なものです。合計で90枚程度のもので、これをベースにして、説明を次第に増やし、その過程で気がついた必要項目をさらに加えて、少しずつ内容を拡充して行きました。記述の順序や分量、記述場所などは、このようにいわば昔の温泉旅館建て増しのやり方では、どうしても一貫しないところが残る、という欠点があります（拙著では指示詞の説明場所がどうにも不適切です）。時間をかけて、さらに模索するしかないと思っております。

このような過程で、色々と問題が生じました。たとえば、音声的な説明の詳しさをどの程度にするのか、という問題は最後まで残りました。これは完全には解決できません。しかし、どれだけ音声記述を充実させても、音声そのものにはかなわないわけですので、ある程度、音声の副教材のようなものを今後、別に作るしかないと思っております。講読篇のみはCDを出したいと思っておりますが、現状の売れ行きではかなり難しいようです。そのため、今回の出馬となっている面も実はあるのです。それから、小さなことですが、当初は例文に普通の訳を付けただけでしたが、最終的には逐語的な訳を付けることに変更しました。実際には、結構な手間がかかり、また、例文の意味が即座に理解できない、という副作用も生まれてしまいました。学習書としては、私には、このやり方のほうが良いように思われたのですが、実際はどうか。今後の評価が気になるところです。

3. 4. これからの課題

これからの課題についてはありすぎて、困るくらいですが、もっとも肝心な点は次のような点だと思います。

実は、概算してみたところ、拙著を作成するにあたって使用した音声資料は、約130時間分（アイヌ語のみに限定すればそれよりはるかに少ない）です。これは、採録した全音声資料の、まだ半分にも満たない量です。今後、残りの資料を用いて、全く違う内容の続編を作りたい、と思っております。今回の経験を生かすと、全く違う記述になるところが出てくると思っておりますが、それもまたある意味、意味があるのではないかと、思っております。しかし、何分にも、今回のほうが売れないことには（また言ってますが）……。それから、内容的には、なんととっても、統語論的現象の解明が全然、手薄です。この方面を、もう少しなんとかしたいと思っております。

本日は、大変お忙しいところ、ご静聴、ありがとうございました。やむをえず、個人的なことに触れたところもありますが、記憶の間違いや、当然触れるべきことに触れなかった部分もあるかと思っております。特に、格好の悪い話、自分に都合の悪い話は避けているところもあるかと思いま

す。あらかじめお詫び申し上げますとともに、あつかましい話ですが、若い世代への一つの参考事例の提示としての意義をお認めいただき、関係の皆様には寛大なお心で見てくださいよう、お願い申し上げます次第です。